
【演題 6】

ヘルスケア業界の抱える課題と新たなフェーズへの挑戦

塩野義製薬株式会社 デジタルインテリジェンス部

部長 小林 博幸 (こばやし ひろゆき)

勤務先：

塩野義製薬株式会社

〒541-0042 大阪市中央区今橋3丁目3番13号 ニッセイ淀屋橋イースト2階

学歴・職歴：

1999年3月 博士（薬学）取得/北海道大学

1999-2001年 Postdoctoral Research Fellow/Yale University

2001-2017年 武田薬品工業株式会社 医薬研究本部

2017-2018年 Axcelead Drug Discovery Partners, Inc. 研究本部

2018-現在 塩野義製薬株式会社 デジタルインテリジェンス部

学位：

博士（薬学）

所属学会：

クリニカルバイオバンク研究会、日本メディカルAI学会

専門分野：

分子生物学、核酸化学、抗体工学、トランスレーショナルリサーチ、デジタル治療

公職・その他：

日本医療研究開発機構（AMED）評価委員

国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）評価員

一般社団法人 日本生物資源産業利用協議会（CIBER）理事

一般社団法人 クリニカルバイオバンク研究会 理事

株式会社 フローラインデックス 社外取締役

要 旨

製薬ビジネスは非常に効率が悪い。1つの新薬を創り出すには約9～17年の長い期間と、数百億円以上の高額費用が必要とされる。一方、その成功確率は0.01%以下と非常に低いと言われている。医療現場のニーズが高いにもかかわらず、新薬開発の難易度が上がる中、この生産性をいかに効率化していくかが製薬企業にとって大きな課題となっている。

一方で、改善の余地が非常に大きい業界とも言える。製薬企業はGMP、GLP、GCPなどGxPに代表される規制産業であるため、各社内には質の良いデータが眠っている可能性が高い。また、昨今、デジタル技術の進歩により携帯電話や持ち運び可能なデバイスなどによりライフログなど健康にまつわる情報の集約、利活用が進んでいる。デジタルやAIなど最新技術を駆使することができれば、製薬ビジネスを根底から変えていくことができるのではなかろうか。

本日はシオノギ製薬が進めるAI¹やデジタル治療^{2,3}の取組例を交えながら紹介させて頂き、健康に関わる新たなエコシステムの構築やイノベーションへつながる機会としたい。

1: 人工知能 (AI) を利用した 24 時間顧客問合せ対応のシステム導入について

<http://www.shionogi.co.jp/company/news/2019/qdv9fu000001l6pj-att/191202.pdf>

2: デジタル治療用アプリ AKL-T01、AKL-T02 の導入に関する Akili 社とのライセンス契約締結について

<http://www.shionogi.co.jp/company/news/2019/qdv9fu000001fvp2-att/190307.pdf>

3: Akili and Shionogi Announce Strategic Partnership to Develop and Commercialize Digital Therapeutics in Key Asian Markets

<https://www.akiliinteractive.com/news-collection/akili-and-shionogi-announce-strategic-partnership-to-develop-and-commercialize-digital-therapeutics-in-key-asian-markets>